

群 教 セ	G14 - 01
	平22.242集

相手意識や目的意識を明確にもってまとめ表現する力を 高める総合的な学習の時間の指導の工夫 — プレゼンテーションのための企画書を取り入れて —

長期研修員 神林 美紀

《研究の概要》

本研究は、プレゼンテーションのための企画書を取り入れて相手意識や目的意識を明確にもってまとめ表現する力を高めようとしたものである。具体的には、伝えたい思いを整理、適切な表現方法であるかを分析、最適な内容や表現方法を選択、伝える内容や表現方法が妥当であるか検証して深化させ、検証を基に伝える内容や表現方法を再構成できる企画書を取り入れて、児童のまとめ表現する力が高められるようになることを研究した。

キーワード 【総合的な学習の時間—小 プレゼンテーション 企画書 まとめ 表現】

I 主題設定の理由

言語活動の充実は今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点となっている。平成20年中央教育審議会答申では、小学校総合的な学習の時間の中で「体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う」活動を重視する必要があることを指摘している。生活・総合的な学習の時間部会でも「言語力育成の観点から、問題解決したことやそこから得た考えや展望について、絵や図、文章で適切にまとめ、表現し、それを身近な人々に分かりやすく説明する活動を重視すること」と述べられている。これらを受けて小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編では、改善の具体的事項として「言語により分析し、まとめ・表現する問題の解決や探究的な活動を重視する」ことが示された。

さらに、群馬県教育委員会の平成22年度学校教育の指針でも総合的な学習の時間に対して、「他者と協同して取り組む学習活動の工夫」をする中で特に、「伝えたいことを明確にしてまとめたり発表したりする活動を重視すること」を求めている。

これまでの総合的な学習の時間の取組としては、体験することや情報を収集することが目的の学習になっていて、体験や得られた情報からどう考えたのかという児童の考えや、だれに伝え何のためにまとめるのかという相手意識や目的意識が明確ではなかった。また、調べたことや体験したことをそのまま発表資料や発表原稿に取り入れた学習発表会で単元が終わることが多くあり、児童の考えや発表の方法を振り返ったり見直したりする活動がなく、児童のまとめ表現する力が十分に高められていなかった。

そこで本研究では、相手意識や目的意識を明確にもって自分の考えをまとめ表現する力を高める指導について研究していく。そのために、伝える相手や目的を意識しながら、伝えたい思いや内容、方法について、見通しをもって児童が思考できる一枚の企画書を取り入れる。児童は、企画書を用いて、だれに伝え何のためにまとめるのか考えながら伝えたい思いを整理し、分かりやすく相手に伝えるために適切な表現方法であるかを分析する。さらに、伝えたい内容や表現方法を選択し、選択した事柄を基に発表資料を作成する。そして、プレゼンテーション練習の際に、自分が伝える内容や表現方法が妥当であるか検証して深化させ、検証を基に伝える内容や表現方法を再構成し、発表資料を見直していく。

このように、見通しをもって思考できるプレゼンテーションのための企画書を取り入れることで、相手意識や目的意識を明確にもって考えをまとめ表現する力が高められると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

小学校総合的な学習の時間において、プレゼンテーションのために整理・分析・選択・深化・再構成できる企画書を取り入れて、相手意識や目的意識を明確にもって自分の考えをまとめ表現する力が高められることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 考えをまとめる段階で、企画書を用いて、「伝える相手や目的を考えながら児童が伝えたい思いを整理」、「伝える相手と目的に照らし合わせて適切な表現方法であるか分析」できるようにすることで、相手意識や目的意識をもって自分の考えをまとめられるであろう。
- 2 考えを表現する段階で、企画書を用いて、「伝える相手や目的を考えながら伝えたい内容、視覚的媒体や聴覚的媒体の種類を選択」し、選択した事柄を基に発表資料を作成できるようにすることで、相手意識や目的意識をもって自分なりの表現ができるであろう。
- 3 考えを深める段階で、企画書を用いて、プレゼンテーション練習の際に「伝える内容や表現方法について検証して深化」、「検証を基に内容や表現方法を再構成」し、発表資料を見直せるようにすることで、相手意識や目的意識を明確にもって自分の考えをまとめ表現する力が高まるであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 相手意識や目的意識を明確にもってまとめ表現する力とは

本研究では、相手意識や目的意識を明確にもってまとめ表現する力を、「総合的な学習の時間の探究の過程のまとめ・表現する過程において、得られた情報と既習の知識や経験と関連付けた新しい自分の考えをだれに伝え何のためにまとめるのかを考えながら、自分の言葉で書き表したり口頭で説明したりできる力」と捉える。本研究では、総合的な学習の時間の学習過程のうち、④まとめ・表現の過程を取り上げ、まとめる、表現する、深めるという3段階に分けて重点的に指導する。

(2) 小学校総合的な学習の時間におけるプレゼンテーションとは

プレゼンテーションとは、「一定の時間内で特定の聴衆に対し、分かりやすく楽しく、説明したり説得したりするための、音声言語とさまざまな媒体を生かした効果的な表現技法」である。さまざまな媒体とは、文字言語やイラスト、写真、音楽を含めた音響効果などを指す。プレゼンテーションについての知識・技能の習得を目的とした学習は国語科で行われている。

総合的な学習の時間で目指すプレゼンテーションは、国語科で学んだ表現技法を生かし、話し手は聞き手や伝えたい内容を考えて説明し、聞き手は話し手の意図を汲み取って聞いて質問・感想・疑問を述べる、話し手と聞き手が双方向でやりとりする活動と考える（表1）。

表1 小学校総合的な学習の時間におけるプレゼンテーションの指導目標分析表

	3,4年	5,6年		3,4年	5,6年
1 内容の構成に関する系列			3 視覚的・聴覚的媒体に関する系列		
1 探究する価値のある課題をもつ	◎	◎	1 視覚的媒体を聴衆に示す・作成する	○	◎
2 多様な手だてで情報を収集する	○	◎	2 聴覚的媒体を聴衆に示す・作成する	○	◎
3 内容の中心とそれ以外の部分を区別する	◎	◎	3 見やすさ・聞きやすさに注意する	○	◎
4 相手意識を明確にする	◎	◎	4 示すタイミングや方法等を工夫する	○	◎
5 目的意識を明確にする	◎	◎	5 視覚的・聴覚的媒体を選択・組成する	○	◎
6 音声言語とさまざまな媒体を使い分ける	○	◎	4 交流を生かした学び合いに関する系列		
2 音声言語による発信に関する系列			1 発表された内容について反応する	◎	◎
1 姿勢・口形・表情を意識して話す	◎	○	2 構成や工夫をとらえ、適否を評価する	○	◎
2 発声・発音に注意する	◎	○	3 自分の考えや情報と照らして、発表を聞く	◎	◎
3 声の大きさ・調子・速さ・間に注意する	◎	◎	4 発表内容について質問する	○	◎
4 場や相手に応じて話し方を調整する	◎	◎	5 発表内容に対して自分の意見を述べる	◎	◎
			6 発表内容をふまえて話し合いを展開する	○	◎

※参考 中村敦雄氏作成 国語科における「プレゼンテーションの指導目標分析表」

(3) プレゼンテーションのための企画書とは

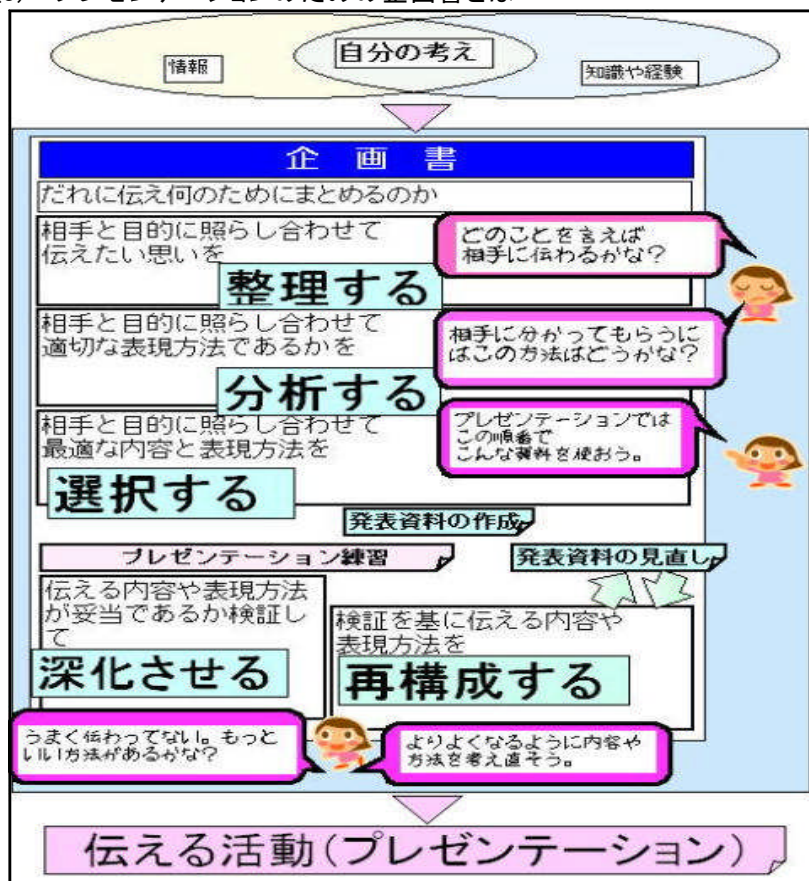


図1 企画書の構造

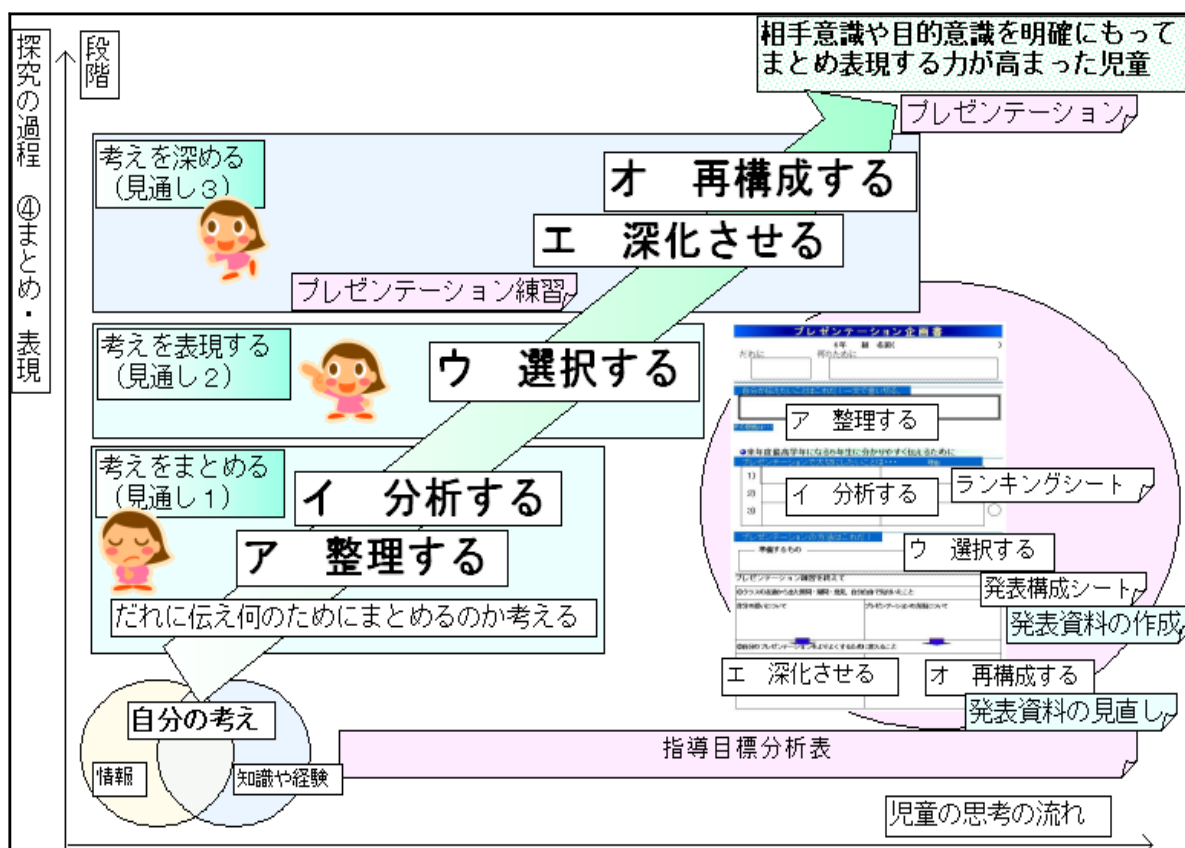
プレゼンテーションのための企画書とは、伝える相手と目的を意識しながら、伝えたい思いや内容、方法について見通しをもって児童が思考できる一枚の紙のことである(図1)。

よりよいプレゼンテーションをするために、児童は常に相手と目的に照らし合わせながら自分の考えを整理・分析・選択・深化・再構成して言葉を選び企画書に記入する。

さらに、企画書に記入した内容を手がかりにして発表資料を作成したり見直したりして実際のプレゼンテーションに臨む。

これらの思考を伴う一連の言語活動が児童のまとめ表現する力を高めると考える。

2 研究構想図



V 研究の計画と方法

1 検証単元の概要

対 象	小学校第6学年	単 元 名	『いざ鎌倉』全29時間
期 間	9月6日 ～ 11月26日	授 業 者	長期研修員 神林 美紀 T2、T3（置籍校職員）
単元の目標	鎌倉の歴史や文化・産業と、関連する群馬県内及び千代田町内の事象について課題を設定し、調べたり比較したりする活動を通してそれぞれのよさや特徴、問題点を見出し、自分なりの考えを形成しようとする。		
単元の内容	①児童が既習の学習内容と自分の課題を関連付けたり自分の住んでいる地域を見直したりしながら小学校生活を振り返り、自分の成長を実感できる。 ②既存の学校行事と関連付けて児童が探究できるような課題を設定することが可能である。 ③児童の興味・関心が高い修学旅行の自由行動時間も本単元の体験活動の一つと位置付けたので、主体的に活動できる。		

2 検証単位における本研究の位置付け

検証単位全29時間計画のうち研究の対象は、まとめ・表現の過程の最終10時間のうちの8時間である（図2）。既存の学校行事である修学旅行の自由行動時間は、児童が課題追究するための情報を収集する時間14時間のうちの5時間とした。



図2 検証単元の学習の流れと本研究の位置付け

3 抽出児童

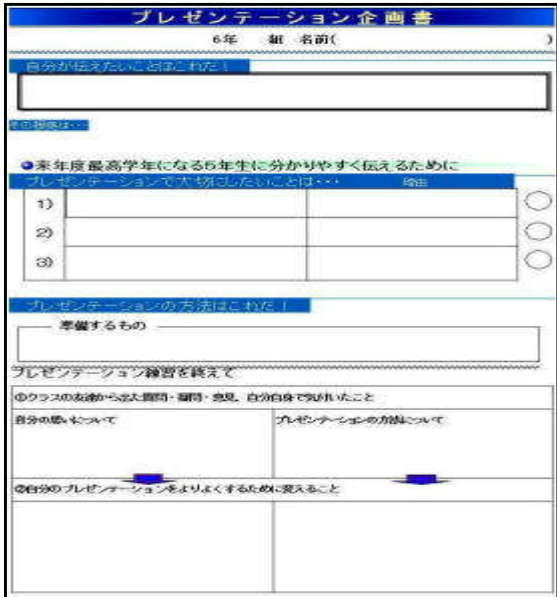
A	自分の課題設定は意欲的に行うが、設定した課題について調べたことや資料をそのまま発表資料に書き写すことが多い。発表に対しても消極的である。課題に対する自分なりの考えを構築したり、相手や目的を考えながらまとめたり表現したりできるようにしたい。
---	---

4 検証計画

検証場面	検 証 の 観 点	検証の方法
見通し1 考えを まとめる 段階	○企画書を用いて、「伝える相手や目的を考えながら児童の伝えたい思いを整理」、「適切な表現方法であるか分析」できるようにしたことは、相手意識や目的意識をもって自分の考えをまとめる上で有効であったか。	・だれに伝え何のためにまとめるのかを考えて、伝える相手の情報量や知識量を推測し、情報を取捨選択しながら、伝えたい思いや考えた表現方法は適切であるかを分析して、企画書に書き込んでいるか見取っていく。 (企画書 対話 行動観察 振り返り)
見通し2 考えを 表現する 段階	○企画書を用いて、「伝えたい内容、視覚的媒体や聴覚的媒体の種類を選択」し、選択した事柄を基に発表資料を作成できるようにしたことは、相手意識や目的意識をもって自分なりの表現をする上で有効であったか。	・だれに伝え何のためにまとめるのかを考えて、選択した視覚的媒体や聴覚的媒体の種類、伝えたい内容を企画書に書き込み、書き込んだ内容を基に、発表の構成を考え言葉を選びながら発表メモを作成したり、図や表・写真・動画などの媒体を選んで資料を作成したりしているか見取っていく。 (企画書 作成した資料 対話 行動観察 振り返り)
見通し3 考えを 深める段階	○企画書を用いて、プレゼンテーション練習の際に、「伝える内容や表現方法について検証して深化」、「検証を基に内容や表現方法を再構成」し、発表資料を見直せるようにしたことは、相手意識や目的意識を明確にもって自分の考えをまとめ表現する力を高めるために有効であったか。	・練習の際に、自分のプレゼンテーションの内容や表現方法についてよりよいものにするために児童が自分で気付いたことや友達からの指摘を受けて考えた事柄を企画書に書き込み、プレゼンテーションの内容や表現方法を考え直し、考え直した内容を基に、発表資料を見直しているか見取っていく。 (企画書 対話 行動観察 振り返り)

5 検証単元の計画（研究対象部分）

『いざ鎌倉』（全29時間計画）のうち、④まとめ・表現の過程10時間の計画を以下に示す。

段階	時間	学 習 活 動	みとりのポイント
考えをまとめる（見通し1）	第1・2時	学習のめあて 5年生に自分たちの思いが伝わるプレゼンテーションをしよう 自分の考えをまとめよう 整理する ○伝える相手と目的を考える。 ○企画書を用いて、自分が伝えたい思いを整理する。 ○歴史学習が未習で実際現地に行ったことがなく自分たちと同じ経験をしていない5年生にも内容がよく伝わるプレゼンテーションをするために、企画書を用いて自分が考えた表現方法は適切であるか分析する。 分析する	・伝える相手の5年生の知識や情報の量を推測している。 ・伝える目的は『いざ鎌倉』学習をして自分が学んだことや考えたことを伝えることなので、自分の成長への気付きや考え方の変化などを自分なりの言葉で企画書に書き込んだり発表したりしている。 ・これまでの学習で得た課題に対する自分なりの考えを、「5年生に伝えたいこと」として一文で言い切りの形にして、企画書に書き込んでいる。 ・5年生にどのように伝えればよりよく伝わるのか自分なりの根拠をもって表現方法を考え、企画書に書き込み、適切な方法であるか分析している。
	第3・6時	自分の考えを表現しよう 選択する ○企画書を用いて、5年生へのプレゼンテーションの内容、表現方法を選択する。 ○企画書に記入した事柄を基に発表メモや資料を作成する。	・5年生に内容がよく伝わるプレゼンテーションをするためにはどのような内容、資料がよいのか考え、企画書に記入している。 ・企画書に記入した事柄を手がかりにして、発表構成を考え、資料を作成している。
考えを深める（見通し3）	第7・8時	自分の考えを深めよう 深化させる ○友達を聞き手としてプレゼンテーション練習を行う。 ○練習を通して気付いたことから、企画書を用いて、自分の伝えたい内容や方法について検証して深化させている。 再構成する ○検証を基に企画書を用いて内容や方法について再構成する。 ○発表資料を見直したり、作り直したりする。	・気付いた考えを企画書に書き加え、自分のプレゼンテーションの内容や方法を見直している。
	第9・10時	○5年生にプレゼンテーションを行う。 ○単元全体の学習を振り返る。	 図3 プレゼンテーションのための企画書

VI 研究の結果と考察

- 1 企画書を用いて、「伝える相手や目的を考えながら児童の伝えたい思いを整理」、「適切な表現方法であるか分析」できるようにしたことは、相手意識や目的意識をもって自分の考えをまとめる上で有効であったか。

(1) 全体の取組

第1・2時は、まず、伝える相手と目的について考える場を設定した。はじめに、プレゼンテーションの聞き手である5年生の人物像をグループごとに想起するよう促した(表2)。

表2 児童が考えた5年生

- ・歴史の勉強をしていない。
- ・歴史上の人物を知らない。
- ・鎌倉について殆ど知らない。
- ・大仏や仏像のことなどよく知らない。
- ・鎌倉がどこにあるのか、よく分かっていない。
- ・ちゃんと聞かなそう。

全体の交流で、「鎌倉の歴史や文化についての知識が殆どないので、5年生にプレゼンテーションを行う場合は自分の課題や考えに関する語句について詳しい説明や補助資料があるとよい」

「3～5年の社会科で学習したことを活かして、鎌倉と同じ観点で住んでいる地域についての資料を用意すると、比べることができて伝わりやすいのではないか」ということが確認された。

また、ある一つのグループから、「自分たちはおもしろいと感じて調べてきた課題であるが、5年生は興味がないのでちゃんと聞かないと思う」との意見が出された。この意見を受けて「ちゃんと聞いてもらうためには、呼びかける言葉を使ったりクイズを出したりして、自分たちの話を聞いてもらう工夫が必要だ」という考えが付け加えられた。

目的意識については、『いざ鎌倉』学習を通して自分たちがどんなことを学んできたのか、自分が考えたことを伝えるため」として、自分なりに考えた言葉でよいこととした。

プレゼンテーションの相手と目的が明確になったので、次は、自分の伝えたい思いを企画書に記入する活動を行った。自分を主語にして、「ぼくは・私は～を伝える」という一文で、簡潔に、言い切る形で記入することとした。根拠については、今まで収集してきた情報の中から、5年生に自分の伝えたい思いを理解してもらうために、必要だと思う根拠だけ書くよう促した。

最後に、どのように伝えれば相手に伝わるプレゼンテーションになるのかを考えられるようにした。児童が今まで学習したことを想起できるよう作成したランキングシート(図4)を使って、プレゼンテーションで「自分が大切にしたいこと」を3点選ぶ場を設定した。その後、伝える相手や目的に照らし合わせて自分が大切だと考えた方法が適切であるか考える時間を確保し、企画書に記入できるようにした。児童は伝える相手や伝えたいことを意識したり、今までの経験と結び付けたりして判断することができた(図5)。

自分が大切にしたいことを3点選ぶ場を設定した。その後、伝える相手や目的に照らし合わせて自分が大切だと考えた方法が適切であるか考える時間を確保し、企画書に記入できるようにした。児童は伝える相手や伝えたいことを意識したり、今までの経験と結び付けたりして判断することができた(図5)。

プレゼンテーションランキング	
● 5年生へのプレゼンテーションで「自分が大切にしたいこと」を選ぶ	
● 下の項目から3つ選ぶ。選んだ理由も考えよう。	
①写真を使う	⑩たとえを使う
②実物を使う	⑪対比を使う
③出来事を図に示す(見てわかるように)	⑫発表メモをそのまま読まない(自分の言葉で)
④どうして調べようと思ったのか理由を言う	⑬説明できる言葉だけを使う
⑤話の「つかみ」でひきつける	⑭かべ新聞を作る
⑥問いかけの言葉を使う	⑮ポスターを作る
⑦一文は短くする	⑯パソコンソフトを使う
● 自分の課題を考えながら、選んだ理由を書こう。	
選んだ番号	選んだ理由

図4 ランキングシート

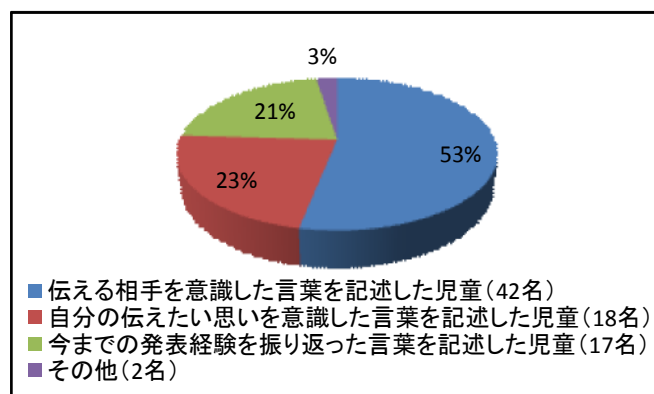


図5 児童が分析の根拠とした言葉と人数

(2) 抽出児童の取組

プレゼンテーション企画書

6年 組 名前()

だれに 5年生 何のために この学習で考える力がついたら事を伝えるため

自分が伝えたいことはこれだ！ 一文で言い切ろう

八幡神社の狛犬と鎌倉の狛犬のちがう所、すい所を自分なりに伝える

その根拠は…

形がちがう。色がちがう。保存の仕方がちがう。鎌倉と千代田の歴史のちがう

●来年度最高学年になる5年生に分かりやすく伝えるために

プレゼンテーションで大切なことは…

1) 写真を見せる。	← 実際の写真を見れば、聞く楽しみが2倍になる。	✓
2) たとえを使う。	見たこと、行ったことのない5年生でも大きさを感ぜられる。	✓
3) 発表メモはそのまま読まない。	見ていない人に失礼。下を向くことになるし、相手の目を見て話すことが大事。	✓

図6 児童が作成した企画書(整理、分析の部分)

抽出児童が作成した本時の企画書は上記の通りである(図6)。さらに児童は本時の振り返りの中で、「今まで鎌倉と千代田の神社のことをたくさん調べてきたけど、千代田も鎌倉に負けないくらい歴史があることを伝えるには、きちんと保存されている八幡神社の狛犬のことで説明することがいいと思った」と記述していた(波線部：伝えたいことを整理している児童の思考)。

また、「5年生は狛犬を見たことはあるが、何のために神社にいるのか分からないと思う」と5年生の情報量を推測し、ランキングシートでは「写真を見せる、たとえを使う、発表メモをそのまま読まない」の3点を根拠を明らかにして選んでいた。

これらのことから、児童は、どのように伝えればプレゼンテーションの聞き手である5年生に自分の伝えたい思いが伝わるのかを考えながら、学習をすすめていたことが分かる。そして伝える相手や目的に照らし合わせながら、自分の考えやその根拠を企画書に記入することができた。児童が思考を整理したり分析したりできる企画書を取り入れたことは、相手意識や目的意識をもって自分の考えをまとめる上で有効であることが分かった。

2 企画書を用いて、「伝えたい内容、視覚的媒体や聴覚的媒体の種類を選択」し、選択した事柄を基に発表資料を作成できるようにしたことは、相手意識や目的意識をもって自分なりの表現をする上で有効であったか。

(1) 全体の取組

表3 提示した基本の型

はじめ	自分の課題 課題選択の理由
なか1	鎌倉のこと よさ 千代田のこと よさ
なか2	共通点 相違点
終わり	調べて分かったこと
まとめ	この学習で学んだこと

児童は、まず、前時に記入した企画書を手がかりにしてプレゼンテーションの内容や方法を選択した。選択した事柄を企画書に書き加え、さらに選択した内容や方法が具体化できるよう発表構成シートを作る活動を行った。児童が既習事項を想起しながら学習できるよう国語科で学習した内容を確認しながら学習をすすめた。発表の構成は、4段構成で、はじめ・なか・終わり・まとめとした。児童が具体的なイメージをもって取り組めるよう、発表の構成の基本の型を提示した(表3)。

しかし、児童一人一人が選択したプレゼンテーションで大切にしたい事柄がそれぞれ異なるので、自分が選択したものを優先して考えるよう促した。話の初めに聞き手である5年生をひきつけたいと考えた児童は、「はじめの部分では、自分がこの学習で学んだことを話し、5年生に問い掛ける言葉から始めたい」とした。

構成シートには、4段構成に合わせて視覚的媒体や聴覚的媒体など準備するものを記入する欄を設けた。児童は、発表する内容と関連させてどのような媒体を準備すればよいか、見比べながら書き込んでいった。企画書に記入する際には、写真のみ用意したいと考えていた一人の児童は発表の構成を考えていくうちに、鎌倉と千代田の位置関係を示す必要があるので地図も用意して見せたいと自分なりに考えて記入しており、この段階で発表方法について再構成していく様子も見られた。

(2) 抽出児童の取組

プレゼンテーションの方法はこれだ！

準備するもの

狛犬の写真(鎌倉、千代田)

図7 児童が記入した企画書(選択の部分)



図8 発表について相談している児童の様子

4段構成で、発表の構成を考えよう。

はじめ 課題 理由	キーワード 狛犬 何狛犬って？ (狛犬の意味) なぜ狛犬？	準備するもの 狛犬の写真
なか1 鎌倉 千代田 よさ なか2 共通点 相違点	鎌倉の狛犬(高德院) 千代田の狛犬(長良神社) ・おどろき ・不思議に思ったこと 色や形、大きさ、さわった感じ 鎌倉と千代田を比較して ↓ 思ったこと 似たような、同じところ 顔 ちがうところ 色 形 元の動物	鎌倉の 狛犬の写真 千代田の 狛犬の写真
終わりの わかった こと	共通点はとても少なかった 相違点はとても多い 神様を守っている点では 同じ	
まとめ 学んだ こと	前に比べて(3年〜) 鎌倉は歴史のあるまち 千代田にもたくさんの歴史的な ものがある。と考えられるように なった。	

図9 児童が作成した発表構成シート

児童は写真を持って発表すると考え、企画書に記入した(図7)。そして、発表の構成は基本の型通りとし、発表の内容について友達と相談しながら、キーワードを中心に発表構成シートに記入することができた(図8・9)。その後、狛犬の写真をA4サイズに拡大したものを画用紙に貼り付け、詳しい説明資料を作成していた。児童は、「写真を見せれば、両方の狛犬を比べて見たことのない5年生にも伝わると思う」と本時の学習の振り返りで記述していた。(波線部：相手意識をもって方法を選択している児童の思考)

これらのことから、企画書を用いて、「発表の方法や内容について選択」し、選択した事柄を基に発表資料を作成できるようにしたことは、相手意識や目的意識をもって自分なりの表現をする上で有効であったと考える。

3 企画書を用いて、プレゼンテーション練習の際に、「伝える内容や表現方法について検証して深化」、「検証を基に内容や表現方法を再構成」し、発表資料を見直せるようにしたことは、相手意識や目的意識を明確にもって自分の考えをまとめ表現する力を高めるために有効であったか。

(1) 学年全体の取組

よりよいプレゼンテーションにするために、4～5人ずつ組んでグループを作り、順番にプレゼンテーションを見合う活動を行った。その内容や方法について自分がよいと感じたところは口頭で伝え、改善した方がよいと考えたところは付箋紙に書き、プレゼンテーションの話し手に渡すこととした。受け取った付箋紙と児童自身が気付いたことから、今まで記入してきた企画書を振り返り、自分のプレゼンテーションを改めて見直すよう促した。

プレゼンテーションで気付いたよいところは、「5年生が分かりやすいように写真を提示したり説明したりしていた」「最初に自分の伝えたいことを言っていたので、分かりやすかった」など相手や目的を意識した意見や、「声が大きく聞き取りやすかった」「話す速さがちょうどよかった」など音声言語の発信に関する意見、「作成したポスターが字が大きく見やすかった」「比較できる

ように写真が並んでいたの一目でよく分かった」など視覚的資料に関する意見などがあつた。

改善点にも、様々な意見があり、「最初に写真を見せるのであれば、これは何だと思いませんか？という問いかけの言葉で始めると、5年生がよく聞いてくれると思う」「鎌倉の位置がよく分からない5年生に地図も一緒に見せると、興味をもってくれてよく伝わると思う」など、プレゼンテーションの内容や構成について自分なりの意見を書くことができていた。

(2) 抽出児童の取組

児童は4人のグループで練習を行った。児童のプレゼンテーションに対して、「狛犬の説明が分かりやすかった」「狛犬の説明の資料にイラストが入っているし、紙芝居みたいで分かりやすい」とよさを認める感想が出された。改善点については付箋紙に書かれた意見を受け取った。

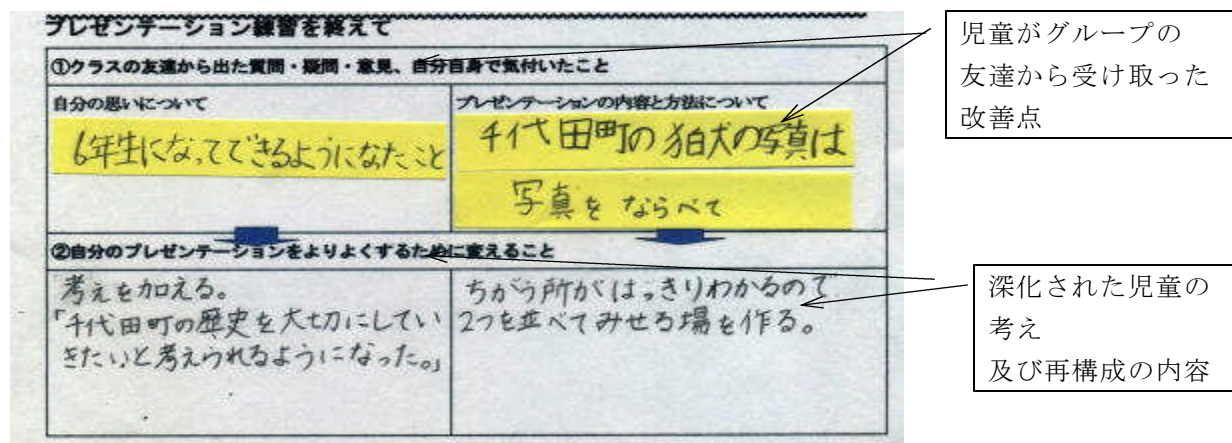


図10 児童が記入した企画書(深化、再構成の部分)

その後、児童は、友達から指摘された改善点や児童自身が気付いたことから自分のプレゼンテーションを見直した。児童は、「5年生に自分が一番伝えたかったのは、この学習で考える力がついた事なので、まとめの部分に考えを付け加えたい」「2枚の写真比べられるように、並べて見せたい」〔波線部：伝えたい内容や方法を深化させている児童の思考、点線部：再構成している児童の思考、(児童の本時の振り返りから)〕と考え、企画書に記入することができた(図10)。そして、再び狛犬の画像や説明になるような情報を収集し、発表原稿や資料を作り直している姿が見られた。

これらのことから、企画書を用いて、「伝える内容や表現方法について検証して深化」、「検証を基に内容や表現方法を再構成」し、発表資料を見直せるようにしたことは、相手意識や目的意識を明確にもって自分の考えをまとめ表現する力を高めるために有効であったと考える。

4 実際のプレゼンテーションを終えて

企画書を取り入れた3つの段階を経て、6年生の児童は本番の5年生へのプレゼンテーションを行った。

プレゼンテーション終了後の5年生へのアンケートでは68名全員が、発表の内容がよく分かったと回答していた。自分がプレゼンテーションをする時に真似したいと5年生が考えた所についての回答の結果を右に示す(図11)。

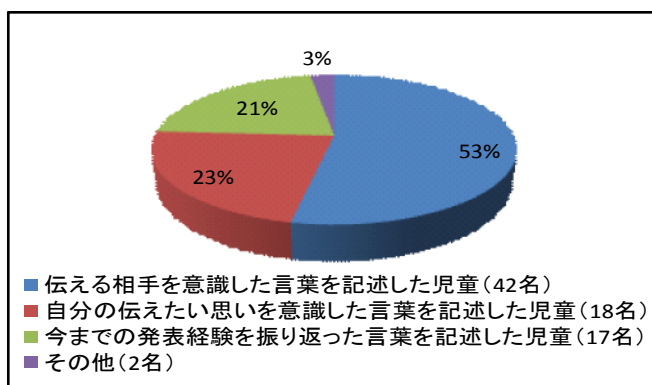


図11 プレゼンテーションで真似したいと回答した所

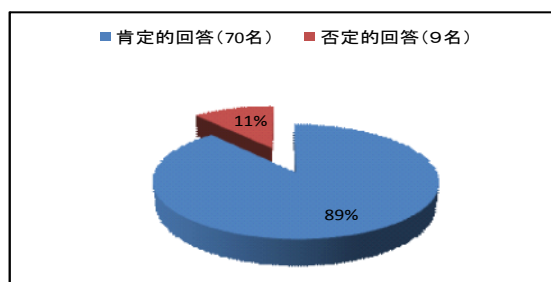


図12 伝えたい思いが伝わったと感じた
6年生児童の人数と割合

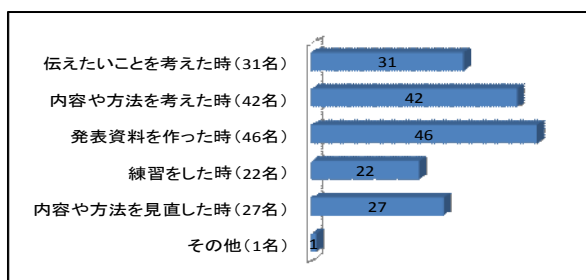


図13 企画書が役に立ったと6年生児童が
感じた時 (複数回答可)

プレゼンテーション終了後の6年生のアンケート結果を上にした(図12・13)。自分の伝えたい思いが伝わったと感じた児童が殆どであった。伝わらなかったと感じた児童はその理由として、「伝える内容や方法についてもっとよい内容や方法があったのではないか」「自分の声が小さく届かなかった」など、自分のプレゼンテーションに対する反省の言葉を記述していた。

また、企画書については、それぞれの段階で自分の考えをまとめたり表現したりする上で、役に立ったと全員の児童が回答していた。

VII 研究のまとめ

1 成果

- 検証授業の第1時で、まず、だれに伝え何のためにまとめるのかというプレゼンテーションの相手と目的を明確にして企画書に記入できるようにしたことにより、児童は伝える相手と目的に照らし合わせてその妥当性を検証しながら、学習をすすめることができた。
- 学習のゴールであるプレゼンテーションまでの流れを思考できる企画書を取り入れたことで、児童は見通しをもって学習をすすめることができ、自分がどのように考えて学習をすすめてきたのか振り返ったり、見直したりすることができた。
- 児童の対話の様子や振り返りの言葉から、相手意識や目的意識を明確にもっていれば、児童は自分の伝えたいことや表現方法について主体的に考え、改善していこうとすることが分かった。学習に取り組みながら、新たな課題を設定できた児童も見られた。
- 学習をすすめていくうちに、授業を振り返る児童の言葉が、「自分の学習態度の感想→学習内容についての感想→次への課題意識、追究の言葉」へと変容した。思ったことや考えたことを文字言語で書き表す言語活動によって、内容が整理されたり、発想が広がっていったりすることが明らかになった。

以上のような児童の姿から、プレゼンテーションのための企画書を取り入れたことは、児童の相手意識や目的意識を明確にもってまとめ表現する力を高めるために有効であったと考える。

2 課題

- 企画書に自分の考えを自分の言葉で書く活動は、個人差が大きい。児童の実態を把握して個別指導するとともに、補助シートの形式をさらに工夫していきたい。
- まとめ表現する力を育てるためには、学年の系統を明らかにし、小中9年間を見通して継続して取り組んでいく必要がある。

<参考文献>

- ・高木 展郎 編集 『各教科等における言語活動の充実 その方策と実践例』 教育開発研究所 (2008)
- ・井上 尚美 関 可明 中村 敦雄 編著 『言葉の力を育てるレポートとプレゼンテーション』 明治図書 (2009)